

地形と遺跡分布からみた柏市域の土地利用

令和4年5月16日

西野 雅人

地形と遺跡分布からみた柏市域の土地利用

1 房総の地形区分と二つの回廊

房総の地形は下総台地、房総丘陵、沖積低地で構成され、水系は3つに区分することができる。下総台地は日本一広い平坦地であり、南部の養老川・小櫃川・小糸川を除くと、台地のなかだけを流れる緩やかな河川が広がっており、台地を樹脂状に刻んでいる(図1)。3つの水系を区分する大きな分水嶺は、二つの自然道であり、各時代に交通路として利用された。



図1 房総半島の地形区分と柏市の位置

茶色線が3大水系の分水嶺。黄色線は中小の分水嶺。柏市域は大半が古鬼怒湾水系に含まれるが、西端部が東京湾水系に跨っている。

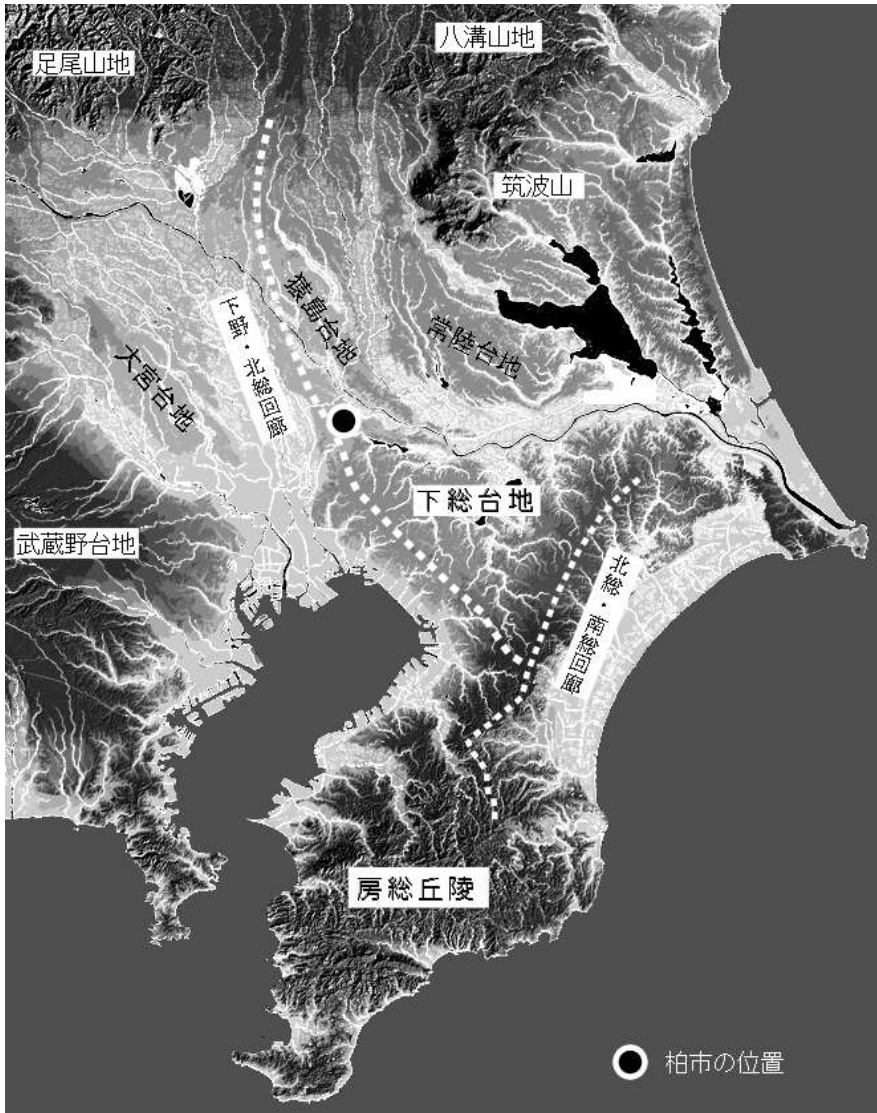


図2 二つの回廊

二つの道とは、①日光・足尾山麓から小山—古河—関宿—野田—柏—鎌ヶ谷—船橋—千葉市土気を結ぶ「下野—北総回廊」と、②房総丘陵と北総を結ぶ「北総—南総回廊」であり、千葉市土気の昭和の森公園内で交差する(図2)。前者は、江戸時代の利根川東遷事業(1654年の赤堀川通水などによって利根川が太平洋に注ぐように付け替えられた)以前に存在した関東で最も長い自然道であり、シカなどの動物が日光・足尾山麓と下総台地の間を移動するルートであったと推定される。旧石器・縄文時代の遺跡が下総台地に集中することや、古代下総国域が結城郡まで長く伸びていたことは、この道が存在したことが大きな理由であったと考えられる。また、近世の牧も二つの回廊を軸に広がっていた。

2 柏市の市域と水系

図3のように、市域の大半は古鬼怒湾水系の手賀沼低地水系に含まれる。ただし、北部手賀沼北岸は我孫子市域、南部手賀沼南岸は印西市・白井市域であり、大津川谷南端もわずかに鎌ヶ谷市域に含まれる。市域の北端部は古常陸川低地最奥部にあたる。北西端は三ヶ尾低地(現在の利根運河)南半にあたり、北半は野田市域である。また柏・我孫子低地北側には茨城県の猿島台地先端と取手台地が存在する。市域の西端は下野—北総回廊を挟んで東京湾水系の矢切低地水系の谷頭を取り込んでおり、流山市・松戸市域に連なる。以上のように、市域は二つの水系のいくつもの小水系に跨ることが特徴であり、歴史や文化を考察する上では、隣接市域を併せて検討することが重要であり、県境を越えて常総台地との関係にも注意を向ける必要がある。

なお、現在の柏市は海岸から遠く離れ内陸的な傾向が強いが、縄文時代早期後葉から前期にかけては、市域の東西にハマグリなどを採取できる干潟と浅瀬が存在した。いわゆる「縄文海進」によるものである。古鬼怒湾水系では古常陸川低地最奥部まで、東京湾水系では今上低地まで入り込んだ海は、縄文時代中期の後半ころまでには手賀沼低地の東端付近まで退いたとみられる。



図3 柏市周辺の水系と分水嶺

3 遺跡分布からみた土地利用の変遷

(1) 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は関東に集中し(図4a)、なかでも下総台地は、全国の旧石器時代遺跡約1万か所の1割を占める最大の遺跡密集地である(図4b)。柏市域もきわめて稠密な遺跡分布範囲のなかに位置する。

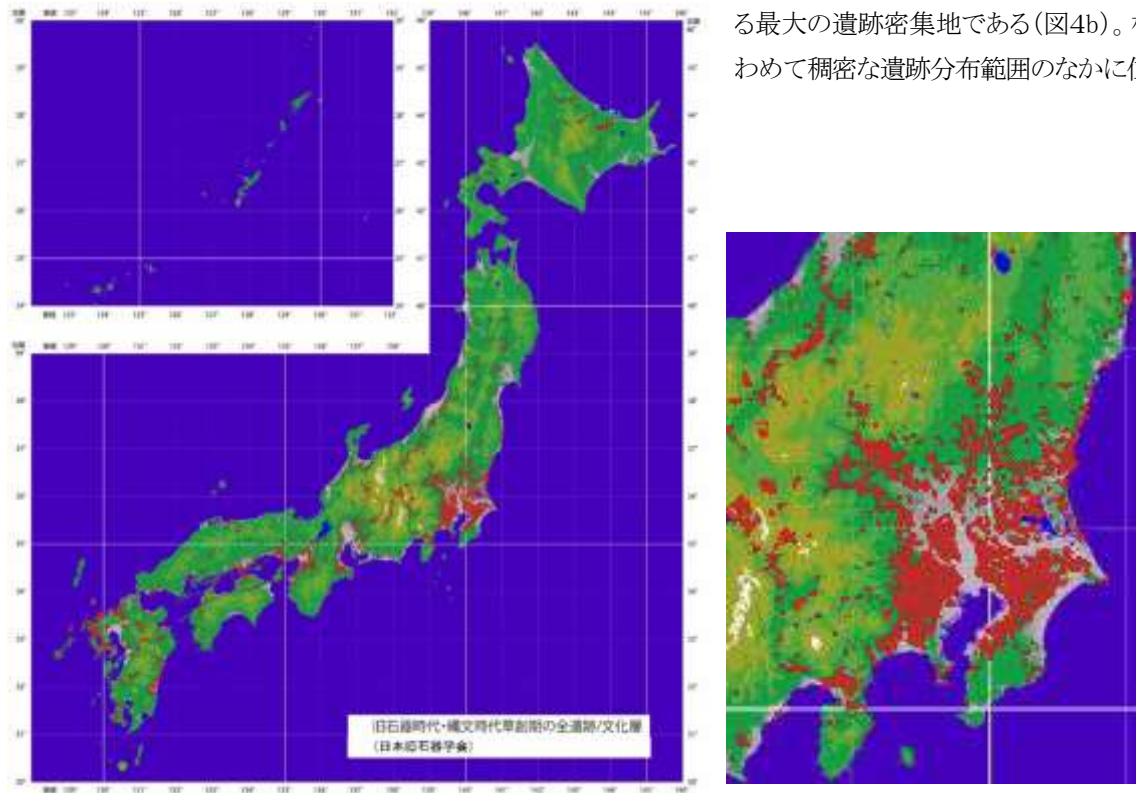


図4 旧石器時代の遺跡分布 (a: 全国、b: 関東付近拡大)

(2) 縄文時代

ア) 概観 奈良文化財研究所の全国遺跡データベース(2008)によると、全国の縄文時代遺跡数は 27,563 件あり、このデータをもとにした遺跡密度図(図5。枝村・熊谷 2009)をみると、関東地方のなかでも下総台地にもっとも濃密であることがわかる。

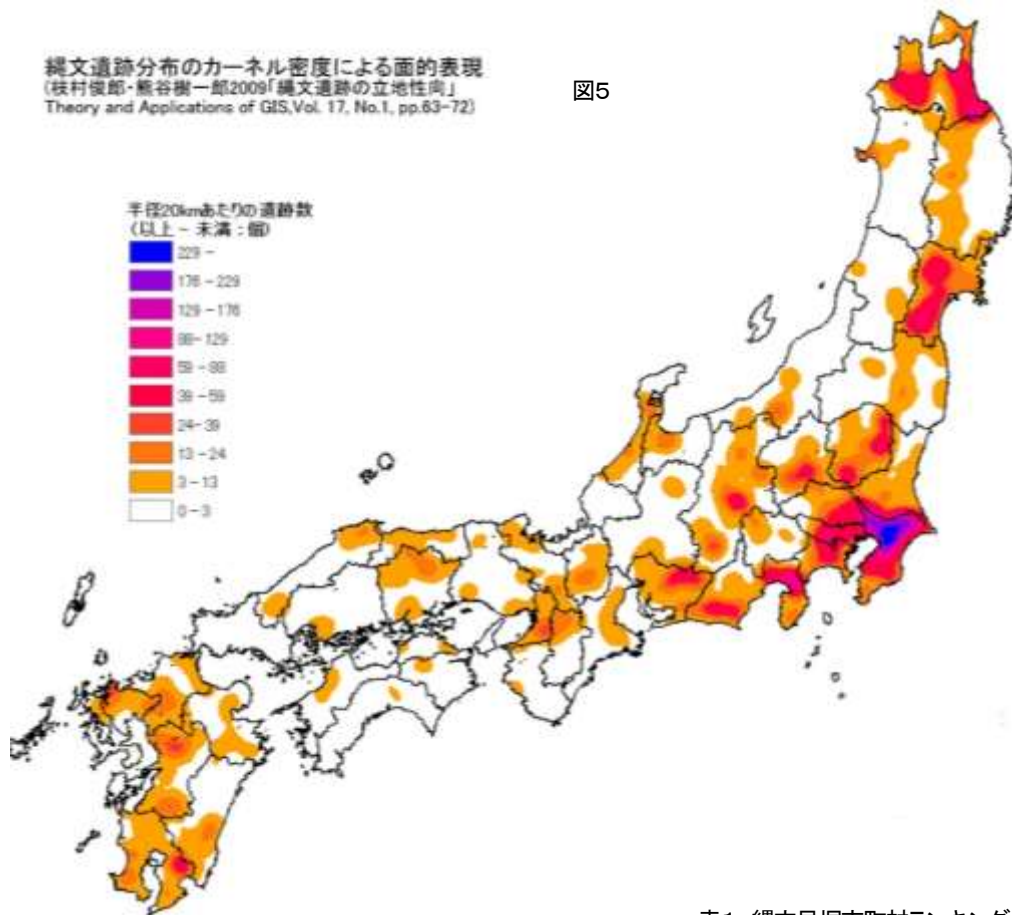


図5

表1 縄文貝塚市町村ランキング

イ) 貝塚 全国約 2,400 か所の縄文貝塚の半数以上が関東地方に集中しており、千葉県は貝塚数約 700 か所は全国の3割近くを占める。世界ではヨーロッパ、北米、東南アジアなどが貝塚の多い地域として知られているが、規模や密度、出土資料の豊かさなどにおいて千葉の貝塚に比肩すべき地域は存在しない。図5は、貝塚が集中する地域に灰色の網掛けをしたものであり、「奥東京湾」を含む東京湾と、古鬼怒湾という二つの大きな内海に面して集中していることがわかる。三大水系別に集計すると東京湾が約7割を占め、古鬼怒湾が約2割、太平洋が約1割となる。

表1は、千葉県内の市町村別の貝塚数をランキング化したものである。柏市の 54 か所は、千葉・松戸・市原・市川という貝塚が多いことでよく知られる4

市町村名	貝塚数	順位1	面積km ²	密度	順位2
千葉市	118	1	272.08	0.434	7
松戸市	63	2	61.33	1.027	1
市原市	61	3	368.20	0.166	13
市川市	54	4	57.40	0.941	2
柏市	52	5	114.90	0.453	8
野田市	46	6	103.54	0.444	6
船橋市	36	7	85.64	0.420	9
流山市	31	8	35.28	0.879	4
香取市	26	8	262.31	0.099	17
成田市	20	10	213.84	0.094	18
我孫子市	20	11	43.19	0.463	10
匝瑳市	17	11	101.78	0.167	11
鎌ヶ谷市	16	13	21.11	0.758	3
印西市	16	14	123.80	0.129	15
佐倉市	15	15	103.59	0.145	14
横芝光町	11	16	66.91	0.164	12
習志野市	10	17	20.99	0.476	5
袖ヶ浦市	12	17	94.92	0.126	16
他の市町村	98	(25 市町村)	
全体	722	か所			

市に続く第5位である。海から遠い柏市だが古鬼怒湾水系の古常陸川最奥部・手賀沼低地と、東京湾水系の矢切低地に多くの貝塚が分布する(貝塚数は西野が管理するデータベースによる)。



図6 縄文貝塚の分布



図7 縄文前期の貝塚の分布(黄色が柏市域)

ウ) 海産資源利用の開始

縄文海進によって二つの大きな内海ができると、東京湾は群馬県や栃木県にまで至っていた(奥東京湾)。一方、古鬼怒湾は鹿島灘に開口し、鬼怒川・小貝川・手賀沼・印旛沼などに向かって入り込み柏市付近に及んだ。内海が発達して海産資源が活発に利用されるようになったのは、今から約7000年前の縄文早期後葉であり、房総の漁撈史は7,000年の伝統をもつといえる。

エ) 環奥東京湾貝塚群

縄文前期には県北西部に貝塚が集中する(図7)。奥東京湾を囲む貝塚の集中の一部であり(図8)、東岸は下総台地北西端(東葛・葛南地域)で、西岸は大宮台地と武蔵野台地である。柏市域は集中の東端にあたり、古鬼怒湾最奥部もごく接近していた。

中期以降大型貝塚が密集する千葉市や市原市にはこの時期の貝塚はごく少ない。東葛・葛南地区はこの時期の人口集中地帯であり、文化の中心だったとみられる。

オ) 中期大型貝塚と貝塚をもたない集落

今から約5,000年前、千葉県湾岸エリアに40数か所の大型貝塚がほぼ一斉にできた。「環状集落」と呼ばれる大きな集落でもあり、それまで比較的小さな単位で移動の多い生活をしてきた人たちがいくつか集まって通年定住型の集落をつくり、新しい共同体社会を築いた。その成立基盤となったのは、関東各地域で発達したさまざまな技術や文化であった。小魚の網漁・ハマグリなどの貝漁は東関東、根茎類の活発な利用や堅穴住居の形態、腰飾のデザインは西関東、堅果類の活発な利用と貯蔵は北関東の影響が見られる。各地域の伝統を受け継ぎながら、下総台地の森林資源と集落から日常的に往来できる東京湾の干潟から得られる海産資源を計画的に利用する生産様式を確立したことにより、定住生活を実現したのである。

中期大型貝塚分布を見ると(図9の赤点)当時の東京湾の湾奥部のもっとも条件の良い2つの地域に集中している。



図8 縄文前期の奥東京湾を囲む貝塚群
(※古鬼怒湾の貝塚は示していない)

IV 期
(中期中葉)

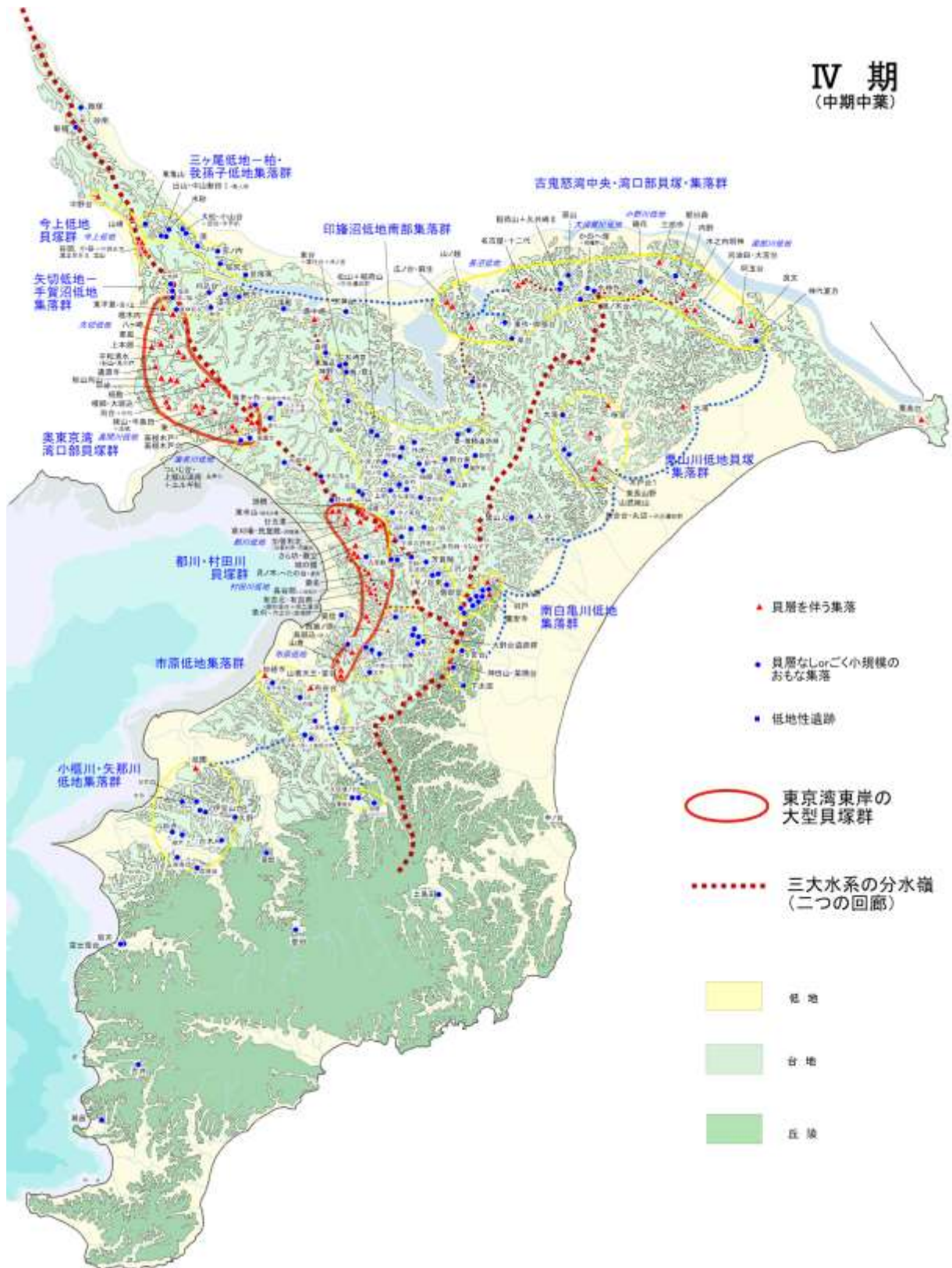


図9 縄文中期中葉の集落分布

ところが近年、それに劣らない大規模なムラの集まりが柏にあることが見えてきた。柏たなか駅周辺の開発に伴って発掘した小山台遺跡・大松遺跡である。「環状集落」が3つあり、その周囲の広域にも遺構が



図10 縄文中期中葉の集落分布(東葛・葛南・印旛地区)

広がっていた。現在発掘中の柏インターの西側の^{でやま}出山遺跡も同様の規模をもつ集落である。この地域にこれほどの規模のムラの集まりが存在するとは全く予想されていなかった。

図10のように古鬼怒湾水系に分布するムラの集まりは、今上低地貝塚群にごく近接しているのに貝層を形成していない。貝殻付きの貝は分水嶺を超えていないのである。もっとも接近しているのは、野田市山崎貝塚と東亀山遺跡であり、出山遺跡はその東側にあるが、東亀山遺跡と出山遺跡ではこの時期の貝層がまったく見つかっていない。集落群の東端は我孫子市並塚東遺跡であり、手賀沼を挟んだ南側には柏市榎方遺跡がある。ちょうど手賀沼大橋がかかる地点であり、縄文時代にもこの部分に渡河地点がそんざいした可能性が高い。

これまで、大型貝塚群の繁栄にばかり目が向けられてきたが、隣り合わせの位置に貝塚をもたない集落群の繁栄があったのである。

カ)後期大型貝塚

中期大型貝塚は、中期後葉に一斉になくなり、小さな単位で移動の多い生活に戻ったとみられる。後期前葉に再び作られた大型貝塚群は広域に展開するとともに、ひとつの水系に生産活動の内容が異なる集落が集まって群をつくる。中期大型貝塚の要素を引き継いだ部分も多いものの、各集落が多様性をもって分業や協業を行うことにより、広域にわたるネットワーク社会が形成されたものとみられる。ネットワークは関東甲信越・東北の広域につながり、貝塚群は多様性を特徴とする巨大な社会の一部に取り込まれた。

後期中ごろには集落数は、東京湾水系の集落は後期前葉より少なくなる。図11はこの時期の集落分布図に推定される交通路(茶色は二つの回廊、橙色は陸路、水色は水路)を付け加えたものである。真間川低地と今上低地には集落が集中し、中間を繋ぐように貝の花貝塚が存在する。印旛沼南部低地は阿玉台式前半から長期に渡っ



図11 縄文後期中ごろの集落分布と推定される交通路

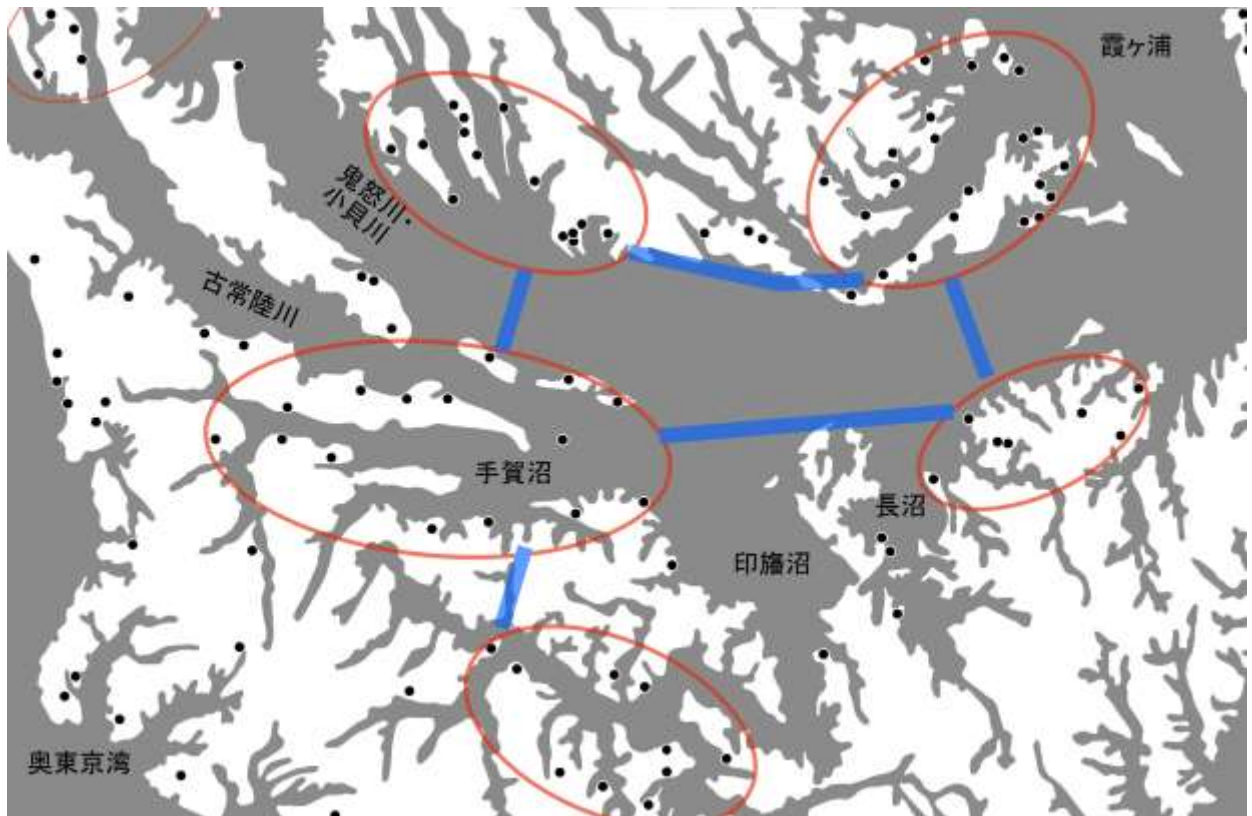


図12 古鬼怒湾を巡る縄文後・晩期の広域集落群

て集落形成が活発だが、この時期に至ってはじめて分布密度が東京湾沿岸を上回る。また、これまで分布が希薄だった手賀沼低地には、低地を囲むように集落が分布する。分布範囲は印旛沼北部低地に連なっており、東端に低地遺跡の吉高一本松遺跡が存在する。柏市域には手賀沼低地南岸から西岸にかけて、岩井貝塚、大井貝塚、上根郷遺跡が分布する。岩井貝塚・大井貝塚は、手賀沼低地北岸の下ヶ戸貝塚・大光寺貝塚と連絡する位置にあり、茨城県の中妻貝塚、立木貝塚、布川貝塚も含めた集落群であったとみられる(手賀沼・古常陸川低地集落群)。この集落群は図12のように、南側の印旛沼南部低地集落群、東側の長沼・大須賀川低地集落群、北側の古鬼怒湾北岸の集落群と連携するより大きな集落群の中心に位置していた。また、上根郷遺跡は東京湾沿岸の集落群と近接しており、二つの水系間を連携する集落であったとみられる。

キ) 集落群間の交通

こうした古鬼怒湾水系の集落群の発展は、丸木舟による水上交通の活発化による広域社会の形成を示唆する。流れが穏やかな手賀沼と印旛沼は丸木舟による集落間の往来に利便性が高かったと考えられよう。一方、東京湾沿岸の集落群との間は、野々下ー上根郷間、曾谷ー中沢ー大井間など陸路でつながっていたものと考えられる。

(3) 弥生時代



図13 弥生時代後期の遺跡分布

弥生時代の房総半島には、生産・居住システムや利用する土器の特徴が大きく異なる二つの集落群・文化グループが存在を認め合い、交流しながら共存した(図 13)。一つのグループは市原市から君津市付近の河口低地で灌漑を伴う水田を共同経営していた集落群である。西日本で発達した新しい文化の担い手であり、大規模な集落のなかに住居跡がおびただしく重複し、墓域を形成する。

もう一つのグループは印旛沼・手賀沼周辺が中心である。住居跡は重複せず、集落の枠組みが見えにくいことから、移住を繰り返しつつ谷津の水田で農耕を行っていたとみられる。東北からつながる縄文文化の伝統を色濃く残した文化の担い手である。

柏市域の集落は、手賀沼・印旛沼低地集落群の西端に位置しており、図 13 には示していないが、茨城県側の集落群にもつながっていた。こうしたあり方は、縄文時代後期中葉～晩期前半(図 11・12)とよく似ている。ただし、分布の中心は印旛沼低地である。これは、東京湾沿岸域が集落分布の空白となり、古鬼怒湾水系と東京湾水系を結ぶ交通の要衝という性格が薄れたことに由来する可能性が高い。東京湾沿岸に集落が少ないのは、図 14 のように3つの土器分布圏の境界に当たっていたためであろう。しかし、弥生時代末から古墳時代初頭に状況は一転する。

(4) 古墳時代

近畿地方の大首長＝ヤマト王権を中心とした首長連合が形成されて国家の礎ができた時代であり、列島各地に大規模な古墳が作られた。房総半島はいち早く王権の前線基地的な役割を担い、大王家や中央豪族が進出するなかで、有力豪族が割拠して各地に古墳群を形成していく。

柏市域は、畿内や伊勢湾付近の外来系土器がいち早く入り込んだ地域の一つであり、環濠をもつ集落や墓域を形成した(戸張一番割遺跡)。

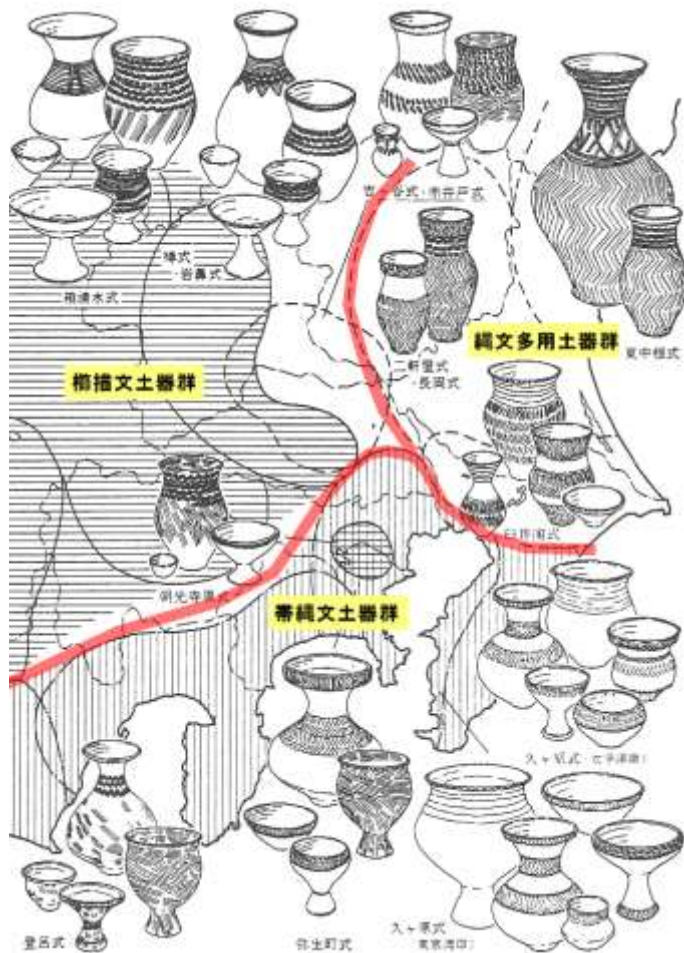


図14 弥生時代の土器分布圏

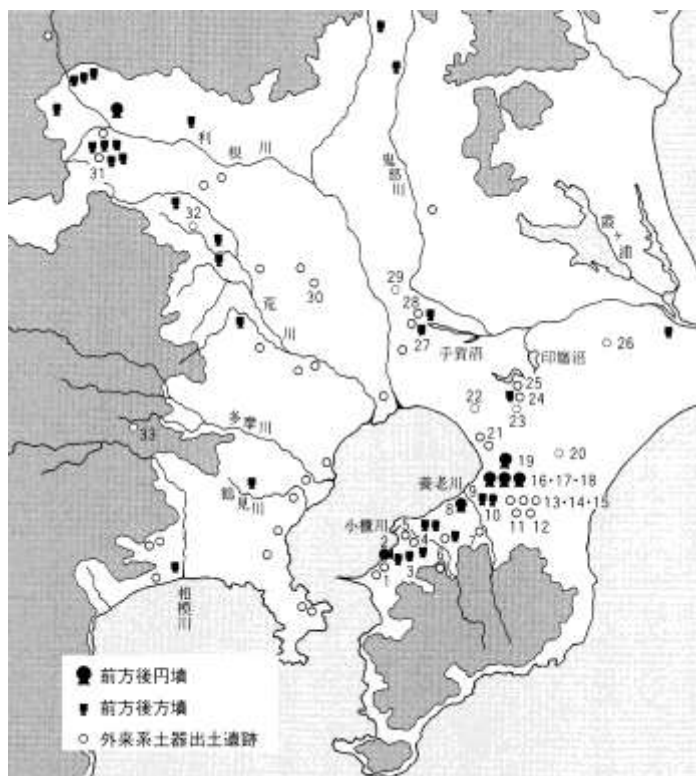


図15 出現期から前期古段階の集落と古墳分布

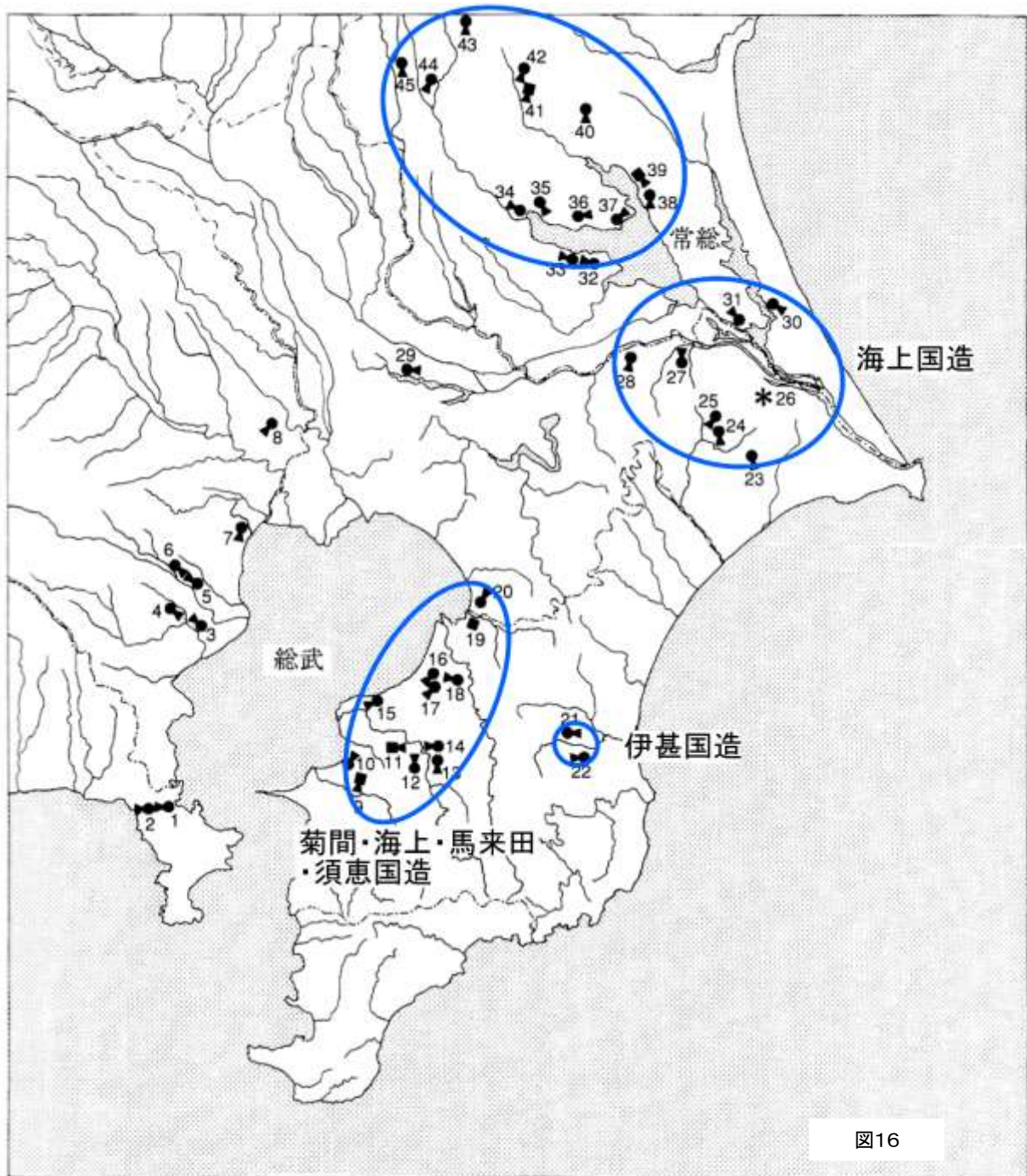


図16

- 1長柄・桜山1号 2長柄・桜山2号 3白山 4観音松 5亀甲山 6蓬莱山 7芝丸山 8高稲荷 9道祖神裏 10手古塚 11滝ノ口向台8号 12飯籠塚 13浅間神社 14白山神社 15坂戸神社 16姉崎天神山 17釈迦山 18今富塚山 19新皇塚 20大覚寺山 21油殿1号 22能満寺 23瀧台 24おけ塚(柏熊1号) 25しゃくし塚(柏熊8号) 26城山1号 27大戸天神台 28大日山1号 29水神山 30宮中野お伊勢山 31浅間塚 32木原愛宕山 33観音山 34常名天神山 35王塚 36田宿天神塚 37寺山1号 38兜塚 39勅使塚 40羽黒山 41丸山 42佐自塚 43長辺寺山 44宮山観音 45芦間山

前期の古墳が多数つくられる頃には、大きな勢力の間となる(図16)。

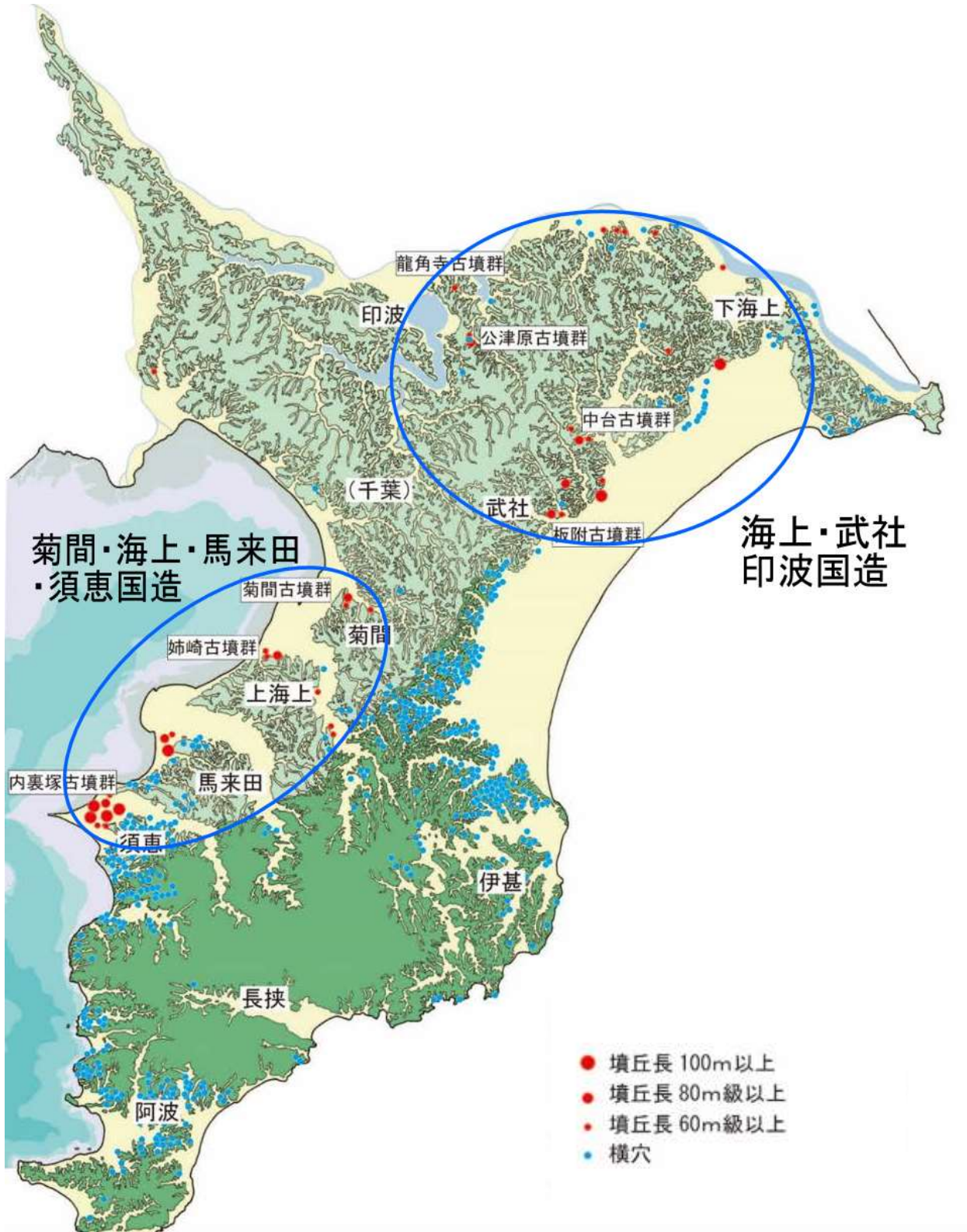


図17 後期古墳・横穴の分布と国造の分布

古墳時代後期にはヤマト王権とつながる地域の豪族が国造に任命され、房総では多くの有力豪族が群雄割拠の呈をなし、二つの大きな勢力が中心となった(図 17)。この間をつなぐ古代の印旛郡・千葉郡・山武郡域では6世紀後半以降に大規模な集落群の開発が行われ、中小の古墳が急増した。

(5) 奈良・平安時代

天皇を中心とした律令国家ができあがった時代であり、地方制度や、地方と都を結ぶ道路などが整備された。東国は軍事を担う土地として重要視された。下総の国域は現在の千葉県域を超えて北西に伸びていた。これにも下野・北総回廊が関係していたと考えられる。

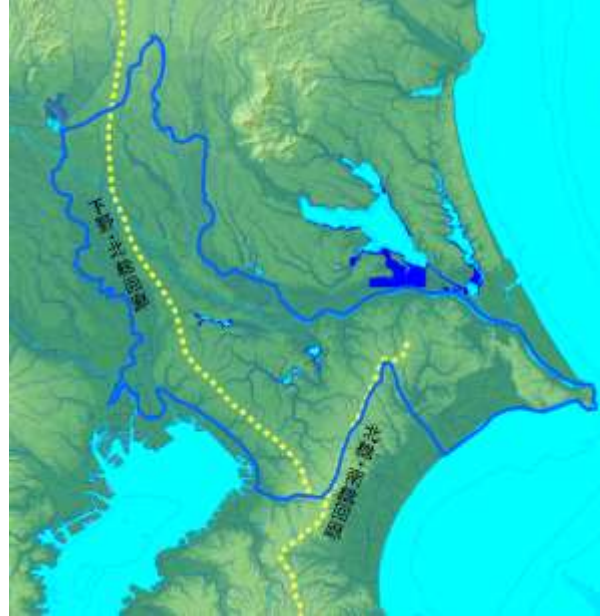


図18 下総国の範囲と下野・北総回廊



図19 古代の主要遺跡と推定交通路

集落分布は古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代前半と傾向を引き継ぐ。奈良時代後半から平安時代の初期は対蝦夷戦の緊張感がもっとも高まった時期であり、兵士や役夫の移住、兵糧の運搬など下総と陸奥間の人的交流が活発に行われた。下総国は、常陸国とともに東国における軍団政策の拠点の役割を果たした。とくに8世紀後半には下総国から相次いで兵士が派遣され、軍事物資の調達の役割も担った。蝦夷との交戦が長期化するなか、陸奥国への兵士の移動や物資輸送の需要が増し、迅速性が求められたことから、宝亀2年(771)東海道の経路が変更された。それまで下総国府・井上駅から上総国府を経由して常陸国へ至る経路をとっていたが、延暦24年(805)に井上駅から北上して柏市域を経由して、常陸国府(茨城県石岡市)―陸奥国へと達する経路となった。平安時代・9世紀代になると、上総国・下総国全体では集落の形成がやや下火になる傾向があるが、柏・我孫子市域には大規模な集落が目立つ。

図19は古代の主要遺跡と推定される交通路を示した作業図である。下総国府から常陸国へ向かうルートは、上記の東海道のほかに、坂川から船越をして手賀沼を抜ける水路も利用可能であったと考えられる。二つのルート付近には官衙遺跡や開発型の大規模集落が集中し、やや離れた場所に製鉄跡や窯跡が分布する。

(6)中・近世

牧の範囲を地形図に落とすと、二つの回廊と枝分かれする分水嶺に沿って展開していたことがわかる。

下総台地は、旧石器・縄文時代だけでなく、古代においても狩猟好適地であった。特産物を購入して都に納める「交易雑物」制度をみると、シカの皮革は上総国がもっとも多く、全体の1割以上を占めており、狩りや皮なめしを職業とする人々の存在を示唆する。下総台地で大掛かりな猟が行われ、それでも捕り尽せないほどシカが多かったと書かれた文献もある。江戸時代には徳川吉宗らが「御鹿狩」を行った。地域の農民が総出で獲物を追い込む空前絶後の大規模な狩りであり、



房総の地形と房総三牧 図20

1725・26年のわずか数日で1,270頭のシカを捕っている。ところが、その70年後(1795年)には、7万人以上を動員してたった130頭であり、1849年にはさらに29頭に減っている。シカの生態学者もこうした史料に注目して、台地や低地に大規模な集団がいたとみている(古林・笹田 2001)。

シカの生息数が回復しなかった原因は、利根川東遷事業(1654年の赤堀川通水など、利根川の流路を太平洋側に付け替え)によるところが大きいと推察される。「南総―北総回廊」は戦国時代の城ですでに閉ざされており、利根川東遷でもう一方も閉ざされると、山麓・丘陵のシカが下総台地に戻ってこれなくなったのであろう。下総台地のシカを追いやったのは、昭和・平成の開発でなく、江戸幕府だったといえる。

4 まとめ

低平な下総台地は、各時代に明確な中心がなく、勢力が広域に分散したことが大きな特徴である。

柏市域は多くの地域に跨るため中心的な場所となりにくく各地を結ぶ交通の要衝という性格が強うかがえる。地域を結ぶ鉄道や国道の敷設を背景に生まれた戦後の発展も、交通の要衝たるが故のことであり、また、東葛飾地区6市の中心に位置することも関係しているのだろう。柏市のこうした地理・地形的な条件を各時代にどのように活かしたかを追究することは、今後の発展や魅力の創造を考える上でも役に立つことだろう。

図の出典

図1・3・6・7・9～13・17～20:西野作成。房総半島の地形は『第一軍管地方二万分一迅速測図原図』のうち千葉県域の97枚をもとに台地と谷をトレースした。東京湾の海域と干潟は『東京湾漁場調査報告』(農商務省水産局)所収の図による。明治初期から中期の姿である。分布データは、図13は小林 2015、図17は白石 1992と萩原 2003による。

図2:地理院地図を加工

図4:日本旧石器学会 2010『日本列島の旧石器時代遺跡―日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース―』

図5:枝村・熊谷 2009

図8:西野・植月 2003 所収の図を改変

図12:西野 2021 を改変

図14:設楽 1999

図15:比田井 1997

図16:白井 2002

引用・参考文献

枝村俊郎・熊谷樹一郎 2009「縄文遺跡の立地性向」GIS―理論と応用 17-1

小林嵩 2015「下総の弥生時代後期土器編年」『千葉大学文学部考古学研究室 考古学論攷Ⅱ―柳澤清一先生退職とともに―』六一書房

白井久美子 2002「前方後墳の時代」『古墳から見た列島東縁世界の形成』

白石太一郎 1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告第44集』国立歴史民俗博物館

中村信博 1998「溝型陥し穴研究序説」栃木県考古学会誌 19

西野雅人 2004「貝塚」『千葉県の歴史 資料編考古4遺跡・遺構・遺物』

西野雅人 2021「遺跡と周辺の地理・歴史的環境」『下ヶ戸貝塚X』我孫子市教育委員会

西野雅人・植月学 2003「動物遺体による前期前葉の生業・居住様式の復元―幸田貝塚と奥東京湾沿岸の遺跡群―」

農商務省水産局 1898『東京湾漁場調査報告 前編』

農商務省水産局 1900『東京湾漁場調査報告 後編の一』

農商務省水産局 1901『東京湾漁場調査報告 後編の二』

萩原恭一 2003「横穴の世界」『千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)』千葉県

比田井克仁 1997「定型化古墳出現期における濃尾・畿内と関東の確執」考古学研究 44-2

古林賢恒・笹田寧子 2001「江戸近郊におけるニホンジカ(*cervus nippon*)の生息状況」野生生物保護 7-1